

『ちよつと田舎』が ちよつとどいい

歴史ある海老名の田んぼ

かつてこの地は海老名耕地といわれ、大化の改新の頃に開拓されたともいわれる歴史ある場所。海老名耕地は縦横のあぜ道で小さく区割りされています。東西に走る1本のなわて道(川田と田の間の真つすぐな長い道)は、「一大縄」の文字をあ

てて「いちおおなわ」と呼んだそう。一本の長い縄を張って一番最初に作ったあぜ道だから「一」。これを基準に「二」「三」と南に広がっています。現在は国分から河原口へ東西に抜ける県道横浜厚木として、古くからの形を私たちに伝えていきます。



▲海老名小学校と海老名耕地。左上の大通りが現在の県道横浜厚木の「一大縄」(昭和32年頃)



▲今も残る中央図書館近くの「いちおおなわ」の看板

▶海老名の歴史を詠んだ歌が書かれる「擬木柱」にも

発展するなかでも 変わらない景色

海老名駅西口に新たなまちが誕生してまもなく2年。駅周辺地区の開発も継続的に進められ、駅周辺の景観は日々変化しています。そんな中、駅からほんの1キロほど離れただけで、昔から変わらない穏やかな田んぼの景色が広がります。「ちよつと都会」と「ちよつと田舎」。ちよつとどいいこのバランスが海老名の魅力の一つです。



▲海老名駅周辺の高層マンションを抜けると田んぼが広がる

田舎気分を味わいに

「ちよつと田舎」の景色の一つ、今では海老名の秋の風物詩となった中新田かかしまつり。平成4年から地域の人たちの力で続けられ、こととして25年目です。わざわざ遠出をしなくても、田舎気分を味わえるかかしまつりは、市内外から多くの人々が訪れる人気のイベントです。



【参考図書】「海老名地名考」「海老名むかしばなし 第二集」

かかしまつりを通じて、 海老名の農業を知ってほしい

ことしは9月9日(土)から始まるかかしまつり。25年前に始まった経緯やこだわり、運営者としての苦労とやりがいをご紹介します。

始めたきっかけは？

私はもともと海老名が地元で、地域のことに個人として関わりたいという思いがありました。生まれたところにはたくさんの方達もいるし、人財もありませんからね。かかしまつりを始めたきっかけはいくつかあるんです。まずはその当時、毎週農家の方が「夕市(夕方の市)」をやっている、かかしまつりに来てもらうことで、海老名のお米や野菜を地元の人にもっと知って食べてもらいたいという思いから。今でいう地産地消ですね。また、その頃は中新田にも住宅がたくさん建ち始めた頃で、田んぼや農業を全く知らない方が増えてきたこともあり、田んぼとの付き合い方を知ってほしい、田んぼのある環境に慣れ親しんでほしいという思いもありました。



ひろた としゆき 廣田 敏之さん

夢は、中新田のかかしを「かかしの全国大会」にデビューさせること

かかしの審査方法は？

まつりでは、出展された作品の審査・表彰も行うのですが、審査の公正を期するために、審査員は作者の氏名を伏せた状態で審査をするんです。また、作品の展示位置も、現地に1から番号をふって置いて、作者にくじを引いてもらって場所を決定するなど、細かいところにもこだわりがあるんですよ。

大変なことは？

毎年心配なのは、やっぱりかかしの出展数ですね。だいたい50体くらいの推移していますが、その年によって多かったり少なかったり、やってみないと分からない。新しいことを始めるのは大変ですが、続けていくのはもっと大変ですね。25年といえば四半世紀。大変ですが、ここまでやってきたのでやめられないという思いがあります。主体的にやってきた人たちが高齢になり、次の世代に引き継ぎたいので、若い人でやってくれる人が出てきてくれることを期待しています。

良かったことは？

毎年たくさんの方が見に来てくれることはうれしいですね。かかしは被写体としても良いようで、アマチュアのカメラマンも大勢来てくれるんです。撮影に毎年来てくれる方もいる。お客さんがたくさん遊びに来てくれることそのものが田んぼにとって鳥よけにもなるし、おいしいお米づくりの手助けになっていると思いますね。

豆知識

海老名で作られているお米って？

海老名で生産されている主な品種は「さとじまん」「キヌヒカリ」など。神奈川県産で初めて特Aランクの評価を受けた「はるみ」の生産も増えてきました。今回のかかしまつりの賞品にもなっています。

かかしまつり
遊びに来てね!

